慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アンリ・ワロンの教育思想に関する一考察： ワロンの「ラブレーと教育」の解釈を通して
Sub Title	Une étude sur la pensée pédagogique d'Henri Wallon : par la lecture de son article "Rabelais et l'éducation"
Author	杉下, 文子(Sugishita, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.44 (1996.) ,p.13- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000044-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンリ・ワロンの教育思想に関する一考察

——ワロンの「ラブレーと教育」の解釈を通して——

Une étude sur la pensée pédagogique d'Henri Wallon

——par la lecture de son article "Rabelais et l'éducation"——

杉　下　文　子*

Ayako Sugishita

L'objet de cette recherche est d'interpréter la pensée pédagogique d'Henri Wallon (1879–1962) par une lecture de son article sur François Rabelais; on peut voir l'idéal de l'éducation à la Renaissance dans son "Gargantua et Pantagruel".

La théorie psychologique wallonienne a été récemment réévaluée au Japon et l'on peut dire maintenant que Wallon est un psychologue qui a attribué au corps un rôle important dans le développement total de l'individu. Comment a-t-il apprécié Rabelais, un représentant de la Renaissance française connu aussi pour son style truculant qui côtoie souvent à la vulgarité?

Pour discuter, j'essaierai de préciser trois sujets chez Wallon dans sa réflexion sur Rabelais et de les examiner consécutivement; (1) l'image de "l'homme complet à la fois biologoque et raisonnable", (2) la signification de l'activité corporelle et de l'apprentissage dans le milieu environnant et (3) l'importance de l'acquisition du langage.

Selon Wallon, la pédagogie développée par Rabelais est, comme celle d'O. Decroly, une "méthode active" certes, mais jamais une "methode antiverbale". Wallon affirme qu'il faut d'abord attacher de l'importance à l'activité corporelle de l'enfant suivant son propre intérêt, mais qu'il ne faut jamais le laisser s'occuper seulement de l'activité sensori-motrice. Il considère que la tâche de l'éducation est d'aider l'enfant à dépasser la perception partielle et actuelle du monde extérieur (connaissance concrète) et à passer à la connaissance du langage (connaissance scientifique); elle doit par son caractère de généralité et d'abstraction être le moyen le plus puissant dont l'homme dispose pour se libérer des entraves d'une société donnée et réaliser en sa personne un équilibre harmonieux de diverses activités.

はじめに

わが国においてフランスの心理学者アンリ・ワロン(Henri WALLON, 1879～1962)の発達理論は[1]，同時代の心理学者ピアジェ(Jean PIAGET, 1896～1980)の理論を社会的な側面から補うものとして解釈され紹介されていた時期も長かった。しかし70年代後半以降，独自の体系としてのワロン理論の解釈が発達心理学者の浜田寿美男によって進められ[2]，その成果を教育学研究に取り込むことの必要性が指摘されてきている[3]。

心理学の理論研究にその活動分野を限定する事のなかったワロンは，階級協調主義を旨とするコンパニョン団(Compagnions de l'Université nouvelle)やフランス新教育グループ(Groupe français d'Education nouvelle)で要職に就いており，今世紀初頭から欧米先進諸国を中心に拡がった新教育運動の重要な担い手の一人に数えられている。またその一方でワロンがナチスに対抗するレジスタンス運動に積極的に参加していた時期から，教育改革案であるランジュヴァン＝ワロン計画(Plan Langevin-Wallon)を完成させた戦後，晩年までを通じてコミュニズムの立場をとり続けたことも事実である。ワロンが携わったこれらの諸活動は，彼が構築した心理学理論とどの様な関係にあるのだろうか。これら

* 社会学研究科教育学専攻博士課程（教育思想史）

が相互に有機的に関連付けられてこそ初めて，様々な立場や場面を通して教育の問題へ関わり続けたワロンの教育や学習活動に対する根本的な「想い」は見えてくるのであろう。

本稿ではワロンの教育に関する言説に彼の心理学理論をつき合わせて，それらの根底に横たわる彼の思想を探ることを目的に，その手がかりとしてワロンが 16 世紀のフランスの作家フランソワ・ラブレー (François RABELAIS, 1483?～1553) の描いた教育について論じた 1953 年の論文を中心的にとりあげることとする[4]。ここで注目したいのは共に医師であったワロンとラブレーには人間の身体活動への関心という共通点が見受けられることである。

フランス教育学における被教育者の身体に対する眼差しの変遷を辿ったチボーの著作のなかでワロンは，心理的働きと器官機能とに「引き裂かれていた身体」を回復させ，人間存在の統一性を確保しようとする新しい身体観模索の出発点と位置づけられた[5]。また既に述べた浜田は，発達過程での人間の身体の重要な役割に注目したものとしてワロンの理論を解釈しているのである[6]。このワロンが「肉体の復権」を訴えたルネサンス人ラブレーの描いた教育に何を見たのかを検討することにより[7]，ワロン自身が教育において身体活動を重視したことの意味が明らかになるのではないかと筆者は考えるのである。

またワロンは別の機会に，16 世紀の教育を今世紀の新教育運動の源とみなす考えを明らかにしていた[8]。このことを考慮するとワロンがラブレーの描いた教育に如何なる可能性を見いだしたのかを探ることは，子供中心を掲げた時代の新教育運動を担いつつ批評家のような立場に終始したとも言われるワロンが[9]，教育に対して何を望んでいたのかを考察するうえで大きな意義を持つのではないだろうか。

以上のような観点から本文では，第 1 章ではまずワロンの「ラブレーと教育」の背景をおさえるためにこの論文が発表された文脈と論文で考察の対象とされたラブレーの作品中の諸場面を概観した後，第 2，第 3 章でワロンがそこから読みとった要素を整理検討し，その結果をワロンが生きた時代の新教育運動のなかでの彼の主張と関係づけて考察を試みることとする。

1. F・ラブレー『ガルガンチュワとパンタグリュエル物語』とワロン

1.1 『ガルガンチュワとパンタグリュエル物語』

フランソワ・ラブレーはルネサンスで最も重要なフランス人作家とされている。フランシスコ会そしてベネディクト会の修道士でもあったが，法衣を脱いだ後には医学をも修め，医師としても名を馳せた人物である。その彼が中世の民間伝説物語『なみはずれて魁偉なる巨人ガルガンチュワの無双の大年代記』を模倣してしたためたのが風刺小説の連作『ガルガンチュワとパンタグリュエル物語』である[10]。

巨人王のガルガンチュワとパンタグリュエル親子を中心として展開させられるこの物語は，当時俗語と呼ばれたフランス語で書かれ，知識人層にとどまらない多くの人々に向けられたものであったと言われる。ラブレーの意図は読者を笑わせ楽しませることにあるのだと表明されており，実際その自由闊達な内容や語彙には卑俗と言うべきものも多い。しかし，この書物は見かけは質素であるが中には貴重なものが納められていたという「シレーノスの筥（はこ）」のようなものであるから[11]，うわべの面白おかしさに惑わされることなく「一段と高い意味に解読」するようにと連作の第 1 巻の序詞でラブレー自らによって断られており，様々な角度からの寓意的解釈が期待されていることは明らかである。

1.2 ワロンとラブレー

ワロンが論文「ラブレーと教育」をフランス共産党系の教育誌『学校と国家』(19 号) において発表した 1953 年は，ラブレーの没後 400 年を記念する年であった。同誌の一つ前の号 (18 号) に掲載されたラブレーにおける教育活動の様子を概観する論文をうけて[12]，これを深めラブレー教育思想の重要性の歴史的意義を考察することがワロンの目的であるとされた。

ワロンがラブレーに関してどの程度の関心と知識を持っていたのかは不明であるが，これ以前 1951 年の論文のなかでもラブレーについての当時の新しい研究成果について触れるなどしており[13]，没後 400 年に際してのラブレー回顧の流行に乗っただけで「ラブレーと教育」の執筆に臨んだとは考え難い。

またワロンのラブレー論が発表されたのは，他の一論文を含め共産党系の雑誌上においてのことであった[14]。「ラブレーと教育」の冒頭部ではエンゲルスの『自然の弁証法』のなかのルネッサンス時代に関する次のような一節が引用されている[15]。

「それは人類がそれまでに経験したこともなかった最大の革命であり，巨人を必要とし，巨人を生みだした時代であった，―思考力と情熱と性格の多才と博識の巨人を―」

このエンゲルスの一節をルネサンス解釈の視点として

掲げることは，共産主義の立場からの他のラブレー論者たちと共通している[16]。しかし，巨人の物語を書いたラブレー教育思想上の「巨人」性を分析しようとするこの論文上でのワロンの試みは主として彼独自の心理学的見地からなされており，その意味でラブレーを当時の共産主義思想に結びつけて賞賛する事に終始したきらいのある他の著作とは一線を画していると言えよう[17]。

1.3　ワロンが考察の対象とした「ラブレー教育学」

ラブレーはこの時代の少なからぬ他の著作家達のように教育論を残しているわけではないので，「ラブレーの教育」は彼の風刺物語における描写を通して議論されるのが常である。ワロンの論文で特に考察の対象となったのは，4巻ないし5巻にわたる物語のなかでも『第一之書ガルガンチュワ物語（パンタグリュエルが父大ガルガンチュワの世にも畏怖すべき生涯の物語）』と『第二之書パンタグリュエル（魁偉なる巨人ガルガンチュワの息子にして，乾喉国王，偉名ならびなきパンタグリュエルの畏怖驚愕すべき言行武勲の物語）』の2巻のうちの10数章であったが[18]，その内容は概観すると以下のようなものである。

『第一之書』では「尻を拭く妙案を考え出したガルガンチュワの優れた頭の働きを」認めた父親が息子ガルガンチュワに教育を与える必要性を感じ，教師をあてがうことから「教育」のシーンが始まる[19]。

ガルガンチュワの最初の教師は神学者（詭弁学者）達であった。彼らから中世以来の提要の丸暗記を課されたガルガンチュワは，途方もなく長い年月をかけてそれらを逆さまから唱えられる程までになる（第14章）。しかし父親は，厳しく勉強をしている様子なのにもかかわらず息子が「それらから少しも得るところがなく，さらに悪いことには，頭が変になり，薄のろになり，すっかりぼんやりして，ぼけてしまった」ことに気付く（第15章）。実際にはこの中世的な教師のもとで生徒は，怠惰な生活を送り起床の途端から大食をし，不衛生かつ運動不足であり，意味の分からないお祈りばかりをしているか娯楽遊戯に耽っているかであったのだ。

息子を心配する父親に「新しい教育」で育った少年ユーデモンが紹介される。見知らぬ人の前では，おいおい泣き出し帽子で顔を隠すのが精いっぱいのガルガンチュワとは対象的に，理路整然と話しをし洗練された身のこなしをするこの少年に感心した父親は，ユーデモンの師であるポノクラートを教師として息子につけることを決心する。

新しい教師の下でガルガンチュワは，それまでの悪癖を浄めた後「一日のうち一時間も無駄にならぬような規律で」教育されることになる。しっかりと書物に向かう為の勉強時間がとられる他，規則正しく早朝に起床した直後身体を拭いてもらったり洗面所に入っている間も聖書が朗読されまた，朝夕のちょっとした時間も空模様や星の運行の観察に割かれるのである。適度な運動によって食欲が増進させられてからつく食卓もまた，食物についての性質や効能についての知識を得る機会となる。カルタや賽子を使って算術を学んだり，その他幾何学，天文学，音楽の学習をも進めていった（第23章）。雨天の日には戸外での学習や身体訓練の代わりに，手作業や絵画彫刻に勤しんだり，様々な職業に就く人々のところへ見学に行き「その道その道の技芸発明を学び取り，これを考究した」。月に一度は休息のために田園へと出かけたが，それは農耕をうたったラテン語の詩を朗読したり暗唱したりする機会でもあった（第24章）。

こうした新しい教育の結果，ガルガンチュワは着実に進歩していくわけであるが，この充実したカリキュラムの下での勉強は「学生の勉学と言わんよりも，むしろ王様の暇つぶしのお慰み」の様であったと形容されている。

作品としては先に書かれた『第二之書』には，ガルガンチュワが父親となって登場し，遊学中である息子のパンタグリュエルに手紙を届ける一節がある。フランス中を回ったがどこにもしかるべき教育が見つからないままパリに滞在中の息子に，ガルガンチュワは何を学ぶべきかを意見する（第8章）。

自分が若かった頃には「蛮族」に邪魔されていた「良き学問」の一切が「復旧」され，特にかつては学ぶことを禁止されていたギリシャ語に関して「これを知らずして自ら学者と名乗るは恥辱」とみなされるようになり，誰もが「めでたき学芸を謳歌し，その天来の糧を」得ようと望むようになった現状を父ガルガンチュワは大いに喜んでいる。そして彼は息子にギリシャ，ラテン，ヘブライを中心とする語学の学習，幾何学，算術，音楽，天文学，民法の修練そして大自然のなかの全ての存在について知ること，医学書からの知識だけでなく解剖によって「人間と申す別個の一宇宙の完全なる」知識を得ることなどを薦め，学習へと向かう彼を励ますのであった。

2.　全き人間像と身体活動～ワロンはラブレーの描いた教育に何を見いだしたのか（その1）

しばしば卑猥であるというレッテルを貼られてきたラブレーの作品中には，性欲や食欲などの肉体的欲求の充足に関する描写が数多く登場する。ところがワロンはラ

ブレー文学のこの特徴を作者のあけすけな陽気さの表明として片づけはしない。これはラブレーが肉体的な「欲求充足を人間存在にとって必要不可欠な基盤」と捉えていたことの証であり[20]，この彼の思想は人間の身体をより大きな有機体や宇宙全体のメタファー（ミクロコスモス）とみなしていた当時において「人間と宇宙との関係」との関係を覆す大きな意味を持ったのだとワロンは言う[21]。

キリスト教の神を中心につくられた中世的道徳世界の中では，人間は「禁欲主義が肉欲の誘惑に負けるか」であった。ラブレーの作品中，不健全で禁欲主義的な生活とその一方での同じくらい不健全な肉欲に対する精神的むさぼりの様子は，ガルガンチュワの最初の教師たちとその教育に象徴的に描かれていた。これに対して新しい教育の下でラブレーの巨人達は，神を敬う心を忘れずしてかつ様々な知識の学習を進め，その過程には楽しく適切な飲食や休息を取り入れてむやみに自らの身体を痛めつけたりはしない。ワロンに依ればラブレーは，中世的な「神聖であるか罪であるか」の人間像に対して「自らの充実と統一性のうちにある真の人間 (l'homme réel dans la plénitude et l'unité de son être)」像，言い換えれば「生物学的でも理性的でもある全き人間 (l'homme complet à la fois biologique et raisonnable)」像を提示したのである。

この「全き人間」の一つのモデルとして現れたのが少年ユーデモンである。彼の自由でかつ洗練された態度は，見知らぬ人々の前では身動きできなくなっておいおい泣き出すだけのガルガンチュワとは対照的である。ここに描かれたユーデモンの持つ貫禄は，表面的なとって付けたようなものではない。それは個々の人間の「身体的側面として一般に見分けるところのものと道徳」的側面との間の「適正な均衡」の立ちあらわれなのだとワロンは言うのである。

3. 身体の活動と生活に即した知識～ワロンはラブレーの描いた教育に何を見いだしたのか(その 2)

ラブレーの新しい教育の下では，生徒の生理的状態に大きな注意が払われた。教師は生徒の衛生や食餌に気を使い，一日のうちの食事や知的勉強や休息の為の時間の割り振りにも工夫をこらした。

また生徒の身体活動が取り入れられたことも新しいカリキュラムの特色である。

その一つは「今日我々がスポーツと呼んでいる」身体訓練の機会である。乗馬や水泳，クライミング，跳躍競技，武術など多岐にわたるこれらの身体活動は勝敗を競うことが目的とされているわけではない。ワロンに依ればこれらは，生徒に自身の持てる力やその効力を認識させて「無分別な荒々しさをよく計算された力に」言い換えれば「封建的な蛮行を新興ブルジョワジーの思慮深い精神に」置に換えていくための機会として巨人達のカリキュラムに取り入れられている。「全き人間」として礼儀などの諸道徳を体現する為には「身体を通して自らを知る」ことが重要だという訳である。

ワロンは，人間の心的な自我の意識や自己の身体の概念というものを原初的なものとは考えず，外界の混沌とした一体感のなかから，次第に自他を区別し分離していくことで始めて獲得できるものと考えた[22]。このワロンの発達理論において「自らを知る」ことは，それと同時に自らとは区別されるべき「他を知る」こと即ち認知活動を進め発達していくことに他ならない。人間は物理的に身体を持って「他」の中にこそ発達していく存在であるから，認識主体とその対象を分けることになる「身体」はあらゆる認知の重要な契機であると考えられているのだ[23]。

したがって「身体的な」もしくは「身体を通して」の知識といっても，感覚運動的な認知つまり「自らの筋力を持てる限り様々な方向に発揮すること」によってだけではない。「必要な場合にはガルガンチュワが手紙の中でパンタグリュエルに勧めたように解剖を通して人間の身体を知るべき」なのである。

スポーツと並んで，ラブレーのカリキュラムに取り入れられたもう一つの重要な身体活動が，この解剖を含む実験や観察そして手仕事の様な作業である。先に見たように生徒は日課として自然現象の観察を行い，また市中の職人達から各種の技術を実地で教えてもらう機会も折々持っているのであった。これらの点をとりあげてワロンは，ラブレーの「教育が生徒の生きている日常的な環境の中にとけ込んでいる」ことを確認している。ワロンに依れば，自然的そして社会的環境の中で「他」のあいだに一個の身体を持って存在し発達していく生徒にとっては，自らの身体を通して経験する日常生活の全ての場面がよき学習の機会となるはずなのである。

4. 言語の学習～ワロンはラブレーの描いた教育に何を見いだしたのか（その 3）

ルネサンス期は古典語を中心とする諸言語の学習に大きな情熱が持たれ，五つ六つの言語を操る人物も珍しくはなかった時代である。ラブレーの物語においても同様で，巨人達は古典文学や聖書を繙くことを目的にギリシャ語，ラテン語，ヘブライ語，カルデア語やアラビア

語の学習へと意欲的に臨むことになっている。

この語学学習の情熱に注目したワロンは，これを「宗教的な禁欲主義とは異なった人間のモデルを見つけようとする要求に対して応えるもの」と説明し，そこにおいて言語は「聖書の世界の惨めな被造物であることを越えて，自由な主導権を手に様々な運命の下に生きうる普遍的な存在になるための探求の手段」であったのだと解釈している。

ところで1950年代初頭のこの時期，反射活動に関するパブロフの学説の影響下にあって，ワロンは言語と知識の問題に大きな関心を寄せていた。

ワロンによれば，外界の物理的な刺激を受け外界に向かって反応するという動物の基本的な神経活動の過程には，その外界を映し出す「具体的な認識」言い換えれば「場面の知識」しか存在しない。しかし人間の場合周囲との関係の中で言語能力を獲得すると，多くの感覚的情報（刺激）をも凝縮して一つの言語的なものに変えうるから，認識の内容を充実させ拡張することができる。この言語という表象能力を持つ信号を用いることで一般化と抽象化の能力を得た人間には「外界に関する部分的もしくは状況限定的な認識に止まらず現実の上に立つことが可能になる」。つまり「具体的に認知した」物事のその場での一時的な外観の認知を超えて，それらを「存在せしめているもの」言い換えればその「事物の根源」を知ることができるようになるというのである。この知の在り方をワロンは，所与の条件として自らの周囲に立ち現れた「世界」と自らの関係を変えていく為の最も強い手段となる「科学的知識」「言語的知識」と呼んだ[24]。

勿論言語活動は人間が持つ特定の神経中枢により可能になるものであり，個々人は周囲の社会環境を通じてしか言語体系を使う術を学ぶことはできない。その意味で言語は社会的起源を持ち，特定の社会の思考様式等をも含む遺産を受け継ぎ，反映するものである。また逆に言語の働きがあるからこそ「人類では社会関係とそれによって生じる文明の進化が（中略）一段とたやすくなり，一段と多様なものとなり，一段と安定したもの」となり「これらの獲得物を固定し，世代から世代へと伝達」することも可能なのである[25]。

この様に言語はきわめて社会と密接な関係にあるから，ある言語を学習することは個人がその言語が属するところの社会の「共同経験ないし伝統的経験と」結びつくことを意味する[26]。この言語と社会との相互関係は常に変わりつつあるものであるから，特定の言語の習得によって個人は社会の統制下に入り込んでしまうというわけでは必ずしもないと断りつつも，ワロンはこの文脈からいわゆる母語以外の言語を学習することの意義を明らかにする[27]。

他の慣習や伝統を代表する他の言語に触れることによって，自身が在るところの社会の枠組みから一歩抜け出て，これを客観視することが容易になるはずなのである。「両親の言語とは違った言語」に幼少の頃から接触させることで，新たな人間そして社会を作ることができるのではないかという期待を持っていたと言われるワロンは[28]，ラブレーらルネサンス人たちが古典語を中心とする諸言語の習得へと向けた学習そして教育熱にも同様の願いを見てとったのだと考えられる。

おわりに～まとめと考察にかえて

これまでの検討から，ワロンが評価したラブレーの教育は確かに被教育者の身体活動を重視したものではあるが，その教育内容は決して感覚運動的な作業にとどまるものではなかったことがわかる。筋肉運動による身体の認識から解剖学的な知識に高めていくこと（第2章参照）つまり身体的な経験を「言語的」「科学的な」知識（第3章参照）に結びつけていくことこそ，ワロンがラブレーに見出し，その重要性を説いているところのものなのである。

ワロンの身体活動と言語的知識についての見解は，新教育の実践家であるベルギーのO・ドクロリー（Ovide DECROLY, 1871～1932）の教育方法を評価するワロンの議論の中でも明らかにされている。

ワロンによれば，子ども達の興味から始まることになる個別の観察活動をより一般的な他の物事に関連付けさせ，最終的には子ども達自身がその観察の結果を表現できるように表現手段としての言語の教育に力を注いだドクロリーの方法は「活動的方法（méthode active）」であるが，決して「反言語的方法（méthode anti-verbale）」ではない[29]。これに対し授業において教師が準備してくる玩具を使わせた遊技等を重視するだけの方法は，子どもを環境から切り放して細かい感覚運動的な作業に閉じこめる結果しか生まないであろうことをワロンは指摘し[30]，後に「這い回る経験主義」と批判されることになる「具体的」でしかなく状況限定的で客観性に欠いた知識を与える教育を批判したのである。

ワロンがラブレーに見出したのは，純粋に「経験主義，直観主義」の方法を採る教育ではなかった[31]。そしてワロンがラブレーを自らの目指す「新教育」の祖とみなすとするならば，それはむしろ「言語的知識」の重要性を

理解しており，行き過ぎた経験主義に対するアンチテーゼを唱えうる存在としてのラブレーであったのだ。

ラブレーの描いた過度に盛り沢山な教育計画は物語の中だけの非現実的なものであり，また巨人の王様が主人公であることにも明らかなように，高貴な生まれの恵まれた環境にある者のみを対象とした階級的なものであることがしばしば言われる。

これに対しワロンは異なった見解を呈する。ラブレーの描いた巨人達は特定の個人ではなく「時代のあこがれの全てが統合されてできた人々の共同の模範 (modèle collectif)」であるとワロンは考える。それもこの巨人達は，博学で万能であったりそれが故に何の職業にでも就くことができたりという教育や学習の結果となるべき状態を呈しているという意味で「模範」なのではない。ワロンに依れば彼らは人々に「人間はそれぞれに自分なりの範囲で身体的，技術的，美的活動の調和を実現できるはずであり，またそれは自身にとって大きなよろこびであるはずだということ」を示しているのである。ワロンは，調和のとれた自己を確立していく過程を王様の気晴らしに例えたラブレーに，ものごとを知り発達していく人間の在り方そのものへの信頼を見出したのであり，それがブルジョワ的であるか否かは問題にしていない。

勿論ルネサンスと言う時代が「ブルジョワジーが支配的立場を築く為に交えた最も輝かしい戦い」であったことはワロンも認めている。しかしラブレーの生きた16世紀初頭期に彼を含むルネサンス人達が聖職者や教会権力そして神学者達の握る知的文化の優越に対抗して「知性の自由な行使を求めて立ち上がった」時は，その「自由は人類一般のものとして要求されていた」のであると言う。ブルジョワジーがその「自由」を裏切るのは後世になって彼らの支配的地位を脅かす他の存在に気付きこれに弾圧を加ようとしたときなのであり，その時「ルネサンスの人文主義的な夢は消え去ってしまった」のだ。

「ルネサンスは，それを監視するものから自らを引き離す為の戦いであった」。他から「自らを引離す (s'arracher à)」ことは，「一方で自分に対立した人々の社会を見分け」「一方では自分のものを自分に帰すること」で自分を囲む環境への依存状態から脱して「自分の欲求を他人に対立させることができるようになる」人間像を打ち出すワロンの理論における発達の契機であった[32]。

自らの周囲を囲む既存の社会の慣習や価値観を「具体的に認知」するだけでなく，そこから自らを引き離して「科学的な」視点からそれを検討し，それらに縛られることなく自身のうちに身体的，技術的，美的調和を実現させるべく発達していく人間に対する「ルネサンスの人文主義的な夢」をワロンはラブレーの物語の中に見出したが，この人間像はワロンが発達心理学理論を通じて掲げる彼自身の理想の人間像と非常なまでに重なる。

ルネサンスがこの「夢」を実現させるための一種の道具としてギリシャ・ローマの古代文化を選んだのは「歴史的な事情によって」のことであったとワロンは言う[33]。ワロンは，その諸事情を汲み「シレーノスの筥」であるラブレーの作品の「中味」を吟味しようとしたのである。そのワロン自身もまた歴史的諸事情の下に在りその結果様々な様相を呈しているわけであるが，その内側には彼がラブレーに見出した「人文主義的な夢」がしまわれていたのだとは考えられないだろうか。

註

1) WALLONの読みに関してはフランス語読みに近い「ヴァロン」ではなく慣例に遵い「ワロン」と表記する.
2) 浜田寿美男訳編『ワロン/身体・自我・社会』ミネルヴァ書房，1983年，浜田寿美男『ピアジェとワロン—個的発想と類的発想』ミネルヴァ書房，1994年参照.
3) 西岡けいこ「我が国の教育学研究におけるワロン評価の特色と今後の研究の可能性—子供観の観点から—」『フランス教育学会紀要』第6号，1994年，72～81頁.
4) H. WALLON, Rabelais et l'éducation , in L'Ecole et la Nation, 1953 vol. 19; rééd in Enfance, 1968, 1-2, p. 31～37.
5) Jacques THIBAULT, Les aventures du corps dans la pédagogie française, Paris, J. Vrin, 1977, p. 221.
6) 浜田は『ピアジェとワロン—個的発想と類的発想』前掲書の第2章においてワロンの身体論を整理し，それに考察を加えている.
7) Madeleine LAZARD, Rabelais et la Renaissance, coll. Que Sais-Je? No. 1767, P. U. F., 1979. [M・ラザール『ラブレーとルネサンス』篠田勝英，宮下志朗共訳，白水社，1981年，32頁].
8) H. WALLON, Sociologie et éducation, in Cahiers internationaux de sociologie, 1951, p. 19～33. [ワロン「教育科学としての心理学—教育学における個人と社会の問題をめぐって」『科学としての心理学』滝沢武久訳，誠心書房，1960年，81頁].
9) TRAN-THONG, La pensée pédagogique d'Henri Wallon, P. U. F., 1969, p. 13.
10) Les grandes et inestimables chroniques du grand et énorme géant Gargantua, 1532. F. RABELAIS, Gargantua et Pantagruel [渡辺一夫訳『ガルガンチュワとパンタグリュエル物語』全5巻，岩波書店] なお以下ラブレーの作品からの引用等は全て渡辺訳に準ずる.
11) プラトンの『饗宴』のなかでアルキビヤデスが師匠のソクラテスのことを讃美しつつ例えて「シレーノスの筥」と言ったが，外観は他愛もないがなかに貴重な香料や霊薬が入っている箱のことで，虚構の下に真実が隠されていることの例え．エラスムスの『格言集』のなかにこれに関する記述がある．細川哲士「ラブレー」『ルネサンスの教育思想（下）』上智大学中世思想研究所編，東洋館出版，1986年，58頁.

12) Regis BERGERON, Rabelais et l'enseignement, in: Ecole et la Nation, 1953 vol. 18, p. 22-23.
13) H. WALLON, Sociologie et éducation, op cit. [ワロン「教育科学としての心理学—教育学における個人と社会の問題をめぐって」『科学としての心理学』前掲書，82頁においてワロンは，ラブレーと宗教の問題を論じた研究書 (Lucien FEBVRE, Le problème de l'incroyance au 16 ème siècle; la religion de Rabelais, Paris, Albin Michel, 1942) とその成果について言及している]。
14) H. WALLON, La pédagogie de Rabelais, La Pensée, 1953, 48-49, 77-80. 内容的にはほぼ変わらない為，ここでは先に発表された「ラブレーと教育」を考察の対象とした.
15) エンゲルス「自然の弁証法」大内兵衛，細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第20巻，大月書店，1968年，342頁.
16) R. BERGERON, Rabelais et l'enseignement, op. cit., p. 23. や Paulette LENOIR, Quelques aspects de la pensée de Rabelais, Editions sociales, Paris, 1954, p. 28. にもエンゲルスの同じ一節が引用されている.
17) Henri LEFEBVRE, Rabelais, Paris; Les Editions Français, Réunis, 1955. のなかで著者のルフェーブルはラブレーの描いた教育を，当時のロシアの第5次5カ年計画においてその充実が図られていた総合技術教育 (éducation polytechnique) を先駆けるものであったという点において賞賛している.
18) F. RABELAIS, La vie estimable du grand Gargantua, pére de Pantagruel, 1534., F. RABELAIS, Les horribles et épouvantables faits et prouesses du trés renommé Pantagruel, 1532. (以下それぞれ『第一之書』と『第二之書』と表記する.)
19) 尻拭き話と教育との関係については細川の「ラブレー」『ルネサンスの教育思想（下）』前掲書，71-77頁における解釈を参照.
20) H. WALLON, Rabelais et l'éducation, op. cit. 以下引用部は断りのない限り同論文からのものとする.
21) ヨーロッパ中世における，宇宙や世界というマクロコスモスに対するミクロコスモスとしての身体観に関しては池上俊一『歴史としての身体—ヨーロッパ中世の深層を読む—』柏書房，1992年，61頁を参照.
22) 「「自己」は始めは自分の生理器官の欲求のみによって支配される一連の状況の中にばらばらになってあるようなものである．というのは，子どもは初めはそういった要求と関係のある状況にしか反応できないからである.」「子どもが，周囲の人に対しての依存関係を経験していくとき，まず初めはその関係の一部分たることしかできない．しかし少しずつ個別化と同化の長い学習の積み重ねによって，二つのことを同時に覚える．即ち色々の印象の中から，一方では自分に対した人々の世界を見わけること．一方では自分のものを自分に帰すること，このものによってやがて彼は自分の欲求を他人に対立させることができるようになる.」H. WALLON, Comment se développe chez l'enfant la notion de corps propre, J. de Pcycho., nov-déc. 1931, 705-748; rééd in: Enfance, 1963, 1-2, 121-150. [ワロン「自己の身体を意識し個別化すること」『児童における性格の起源』久保田正人訳，明治図書，1965年，201頁].
23) 浜田寿美男『ピアジェとワロン—個的発想と類的発想』前掲書，190～193頁参照.
24) ワロンの言語論に関しては，H. WALLON, La doctorine pavlovienne et la psychologie, in La Nouvellecritique, 1955, 67, p. 212-220. [ワロン「自然科学としての心理学—パブロフ学説を中心として」『科学としての心理学』前掲書，35頁]，La Langue, Pcychologie et Langage, in Ecole et la Nation, 1952 vol. 13, p. 30-31., 浜田『ピアジェとワロン—個的発想と類的発想』前掲書，226～227頁，を参照.
25) H. WALLON. La doctorine pavlovienne et la psychologie, op. cit., [ワロン「自然科学としての心理学」前掲書，28頁].
26) 同前
27) 「両親の言語とは違った言語」習得の意義に関する記述は H. WALLON, Culture générale et orientation professionnelle, Pour l'Ere nouvelle, 1932, 81, 245-252. [「一般教養と職業教育」『ワロン・ピアジェ教育論』明治図書，1961年，22頁] に見られる。
28) J-F.・ルニ『心理学と弁証法的唯物論』波多野完治，真田孝昭共訳，大月書店，1976年，182頁.
29) H. WALLON, Rapport de la psychologie et de la pédagogie chez l'Decroly, in: Pour l'Ere Nouvelle, 1952, 11-12, p. 64. なおドクロリーの教育法に関するワロンの評価に関してはO・ドクロリー『ドクロリー・メソッド』斉藤佐和訳，明治図書，1977年巻末の解説を参照.
30) H. WALLON, Pédagogie concrète et psychologie de l'enfant, Hommage au Dr. Decroly, Bruxelles, 1932; rééd in Pour l'Ere Nouvelle, 1933, 91, 237-241. [ワロン「具体的教育学と児童心理学」竹内良知訳『ワロン・ピアジェ教育論』明治図書，1969年] においてワロンは，ドクロリーと比較するかたちでモンテッソーリの教育方法に疑問を投げかけている.
31) 「この（ラブレーの作品に見る-引用者註）新教育は要するに方法的には経験主義，直観主義であります.」梅根悟「新教育への道」梅根　悟教育著作選集2，明治図書，1977年，23頁.
32) ワロン「自己の身体を意識し個別化すること」『児童における性格の起源』前掲書，210頁.
33) ワロン「フランスにおける教育」『ワロン選書（下）』波多野完治監訳，大月書店，1983年，255頁.